我樂多文庫 上

本間文庫
文庫 14
A 6
1

文庫14
A6
1

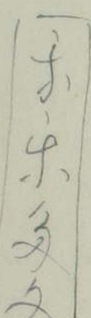
才一編

表紙は紺戸ごうし色 亂色絹糸和綴

たて四寸 横九分の紙

横 四寸五分

縱 六寸五分



才一編

とあり

我輩多社員四名白

東西各開化の御代に。不鉛今あるを青年頭を振い
立て、。蚯蚓の長ながらしく泣く。チョッピリ口上
右申上候。備忘編發売期限わ。時過しも。
創業以來日猶のさく。まして片午間の内職仕事。
貧血なられも暇がかく。有のは社員にならまく
欲すと。大方諸彦の矢文に日文の申込み。続
いて投書の郵便はかり。是ではふふめと等を励
し。玉子に精を付焼又。天晴業物鍛へんかと。
朝の六時に筆を取り。鶏の餌をとるチョコく

と。暇で倫でひろひ書き。勉強苦し居れ共。
腸(ちょう)あるり著作し。詩をつくるやら田を
つくる。目玉のまるる忙しさに。手の無ひ足を
踏むづし。勝をすりむく大まごつき。それも神様
の事あれば。大目に看給へ給へ。二日綾から
して土曜日同大奮発。仍て如上如件。

我が小多文庫第一集目録

我輩多文庫発兆抜露　半可通人
小夜千鳥　浪迺音信　櫻西散人
江鳴山産男　誓貝屏風　半可通人
堅琴双紙　携耕地船
仇櫻　遊里迺夜嵐　西香庵史
遊鴻基記　恒軒居士
七絶及七律　十二首
西後月自序　新作詩　春迺家蓮
墨田川　花紅治史

帝國圖書館藏

和歌　七首

我楽多文庫発兌祝辞　黒宗外史

仝　樵耕生船

豎琴双紙序　緑山樵史

和漢概

探画

新作謎

我楽多文庫第一集

我楽多文庫披露

檄して曰くはチト大業。文して参るはヤヽ艶めく。則ち書をして才子諸彦に告まつる。

夫れ人各楽あり。隣の壁から燈をぬすみて書読むも楽ふり。銅臭きを喜ぶ守銭奴の簞の冷飯に事足とする清貧流も。亦楽むべし。なからずや。傾城の床に流蔵の両徧りをかうりみず。あるは二合半の寐酒に布袍を打殺して。飛び巡障つくるも亦楽の一

部やかし。さんど隣の碎ぬかば。屁を嗅ぶのあそれちきにあらず。銅臭きはぢ。むさし。さりとて冷飯は腹刷ばりて病や起らん。氣を持ねば仇城の涙の雨の洩り所。無一銭では亦酒も飲めず。アヽなへとしやふ。どうとゐやふと。こつて思案のいらばこそ。筆の林に閑居して。不善はちさめ君子等の。快樂と一酒。和歌清文の上ぱより。涙狂文狂詩歌句。四面に堅き角を去り。端歌都〻一の心意字。一切無差別。かきあつめ。我樂多文庫の名にし負ふ。清流

MARUZEN IV

も。我も樂の。多き冊子を月々に。編して而して。読書餘閒の憂晴。意是天下無上の快樂。俱に世とともに有志の君達。珠玉を寶しく秘め給はず。値をまたず。沽んか那くとのたまへ。我もいはん。買はんかなく。

明治十八歳弥生のつかた

柳巷主人 自序

半可通人

白鷗

自恰の田舎諸
妙得法

江鳥土産滑稽日具屏風

東都 半可通人戯著

爰に芝浦の畔に愚二郎鈍太郎備後介とゝ(ゝ)る
三人の放蕩漢あり(ノラクラモノ)ける。年猶若ば
ば定まる事あるべき。出(ハリマヘ)金の貸居に一ツ鍋の飲
もらはゝ(ゝ)喰ふ。家(ヤ)道(ウ)傾(ケ)て世(セ)を馬鹿と。九尺二間の
貸(ヤ)三畳間(ヤ)暮(ラ)す一方。
已(ヒ)の馬鹿と世(セ)を馬鹿と。九尺二間の
裏店に安いて。金殿玉構を羨みそ。三年
前の古褌(ふんどし)解しやかい(さるは)。蓋し是平伸の

自悠子四半仙
赤見蝋蕉仙人
之賛俳亜

自悠子四句
句々意好莫
一見句

狐、変に擬する者の仆。三人共に揃ひて
の変屋人。昔屋中の仙陽きとあり。誰一人
名を呼ぶものなく。昔仙の半仙人とぞ渾名
ける。頃し文月の半過ぎ。日和続きの空
蒸し。炎暑堪へ難き中にて。綿雪隠の襖
曳れ来る自太郎。曰く。暑ければ。寸隙ある暑柱も折
れぬ。曰く。食後の安眠書寝せて呉れ。
遠近に猛句あり。
世事を忘れ。
掃溜の塵切れて大地のあく陽ひる壁苑

自悠子四日
亭留句
得好

自悠子四結束
形作草
蛇

足る。世人を呼んで曰く。眠りなじろかんとす。
此を称する法の半仙人も困じ果て。なる徒
かに談合しつ。辺土の年を言ひ。五六月の
斉貧を践倒して。大屋の仙頂宙を眺めす。
近の庚合屋つは行矣の捲言を拾ふ
方の孫か何その称に。安く家財を売法し。三
束三文朋の巻へ埃込み押込み。兄は路銀に
有明の月を載く菅笠の紐は堅くも弟は克
く。そおいく朝り家に。羽を伸してる者も
切り崖。御山宿を出て三足辺。江の鳥目掛け

て船を待ち居り。」

江戸の

啟軍軒日治新

七律及七律の下、紅葉及び美女のもの

戲寄墨堤某酒家少女　睦亭情史

嬌顏併得紅腰斜。年少佳人在酒家。
若台遶青春艶逾艶。江東誰又説櫻花。

墨堤嬉春詞　緣山散史

橋東買醉追晴煖。十里如雲花不斷。
日暮江風堤上途。落紅輕点美人傘。

暮春　肇軒居士

新芽吹緑水魚肥。軽暖宣晴脱舊衣。然望不堪風雨晩。落花更逐落花飛。

しのかに小倉竹涯、杉谷湘東、小沢碧山、鈴木猪佩氏等の名入力。

蜻蛉日記頭句々碁日法

雨後月自序　春生座董

我世に生るる月日は。高貴を得ん人にもあるべし。

人を恋し世を恋し。求千年のものすに

物る此月の跡もあて。多世を得れ加ぬぞか。

される人とて、我月とて。鈴の命のはかなくも。

昔恋のせにされきて。ゆめのごとかるゆめのえち。

いづれ[illegible]さえんもへみるべと。はるのもはをしかず。

ゆるすゆさるべ此世にて。一夜なすふとのかたりも。

さればゆりゆく、我月をば。野る山るまはろ。

蛙船同引用砲
去好清々奇性

蛙船同双對
絶佳

野きつのうきみなのみより。いざよふ雲と思ひそよ。
かの古の世をすてて里なるころの月をゆし。
寂寞無人の境に分り情淨無垢の赤に堂し。
一心三欲の月を捨てて。一念三千の氣を拔る。
見るまさしきのみ。捨て得るべき物あらず。
為当力行のはるあり。名誉のかざしと知られ。
五車性識の秋の月。名誉の火と入れ水みよ。
さしば古来の英雄の。「アレキサンドル」「ナポレオン」
大「ネルソン」や「ワシントン」。名月を捨しエ名は。
千古無変に輝きて。この宝とすべしも。

MARUZEN IV

蛙船同又有此
一對特見行
文士妙作

霧のいのちの五十年。ゆせ一ちざるのさるや。
蒙に夢ねて地をみれば。男ふに道よきまあり。
そとに悔るもさらぬも。名色とらぬ残すも残すもの。
豪傑不拔の心略と。此代ゆる見れば。
悔りてのちにおくしのぶ。事の結果と思ふべし。
地中の海にあみるく「アルプス」山に雲ほし。
「パンカー・ヒル」の砲声に。ひらめく自由独立の。
旗のしるしは国とりき。波ゆりそん「パイハシス」
さんどうきせの人ごころ。駒のひまゆく歳月を。
花とへもゆのゆめばかり。使ひいづる巻のべの。

円満の相はけさなれど。　さめてくやしき秋の朋。
降るのさばの声も。むかしは同い月の友。
栄枯盛衰夫のあらう。　見わらんものを知らず。
心ずーの、はるあの日は。朝もゝまなひ出る。
何しらくもいつしかに。峯の雨降とゆえばて、
あくタ山のてぐりも。　夜きものひを焼せり
なもかくにも我世をば。　迷ひ我身のつとめる。
貧苦花難にくちかれず。　失躓不幸に祝はれず。
貧は我身の苦けあり。　不幸は我身の宝あり
我をめぐむはあに妻ぞ。　我身を切るは何物ぞ。

MARUZEN

弱の貧は貧のならず。　假る富高ならず。
是州曲直をわかてなば。　自あたらも鴻毛なり。
天に恥ずず地にはぶず。　ものむるを我の良心あり。
見のくあとあるわざの。　ちりぬし人の知りがとも。
花ぞさかあんに日ぞちかし。　心に温る心なるよ。
夢ぐやまぐしろとともに　悔るこをみわけ。
桜折りてすめ死のやる。　受るかりは月のほれ。
我今づるるあふこの。　つてきをと処あが。
時ふふふ人のふば。　是でまことにまのわ。
あかきむそふのなるん。

緩山評論場壮快。使ヘ山仙史瞳
若干其後。
右は西行の月と題する「ドクトル」リヤンが
トンボ作品集の書き
受に餘白あればこの序に登録す
し
可

墨田川　　花紅治史

弥生の空の花曇り。仙人あく墨田の堤。
初めて三圍に。人目の閑屋忍び恋。白

魚すくとる網の。篇にしす明の中。すべて
こめにし玉音は。仙の四竹屋庵峠。今日は逢
瀬の首尾の松。ぬれて嬉森の西路。玉に逢ふ
夜の秋橋。永代橋の赤かけて。雪と契る
弟言の。鐘ヶ淵辺はまくとる。厚き情の後
の恋。淡し寄る身の白波。きくも牛島の賦
夜の。鐘は一路か。
命寺。今の烟
日暮を。徒の山にうつて祈ふ。

和歌部

春の夜の曙は尺々の月野にこそ鶯が
鳴る梅ヶ香　春西京の君

柳枝露

春柳の樹(リ)めくる朝嵐の雨後の玉こそかざし
あり糸　八秋人

古郷春月

古里のあれし軒端も尺々にかげ西陽あもよ
しや春の夜の月　義郎

なつ女に化りて男るあがくる

契りてし言のそなを押よ秋風はいつの頃より吹
和あるくん

青野山

山陽みち野の奥の梅花何ゆえをもわき
て尺るかん

藪蔓

おのつから尺えわたるる竹藪にそこともち
かれ蔓のそく

桂のも

湖花

さいあくれ見のそれかの美盛りあねこ

そよめき志ろがする大和田　紀伊士

MARUZEN IV

我が水多文庫發行の辭

文運日に開け月に進み。訪問録は更に別あり。昨を捨て今を捨て。常に棟に充てる。牛に汗するのみなる。芸陸遠き赤ぶかつて尺さる必あり。はりとりつくも。芸まさ〜ち。意味一方に偏し。和は和。漢は漢。漢は漢にあり。いまだ和漢はあてどりんでの。昨は現すべきもの。永聖せの一大文典。豈慨すべきものきるみふかかと。ゆるさず七ゑつかしく

鮭船日形言
極佳

りあひどの事にもあらねど。かくて日本の世の中
に。別に驚きもせず。而も憤れもせず。丁度秋のよ
さびしさを歎じ。（も御大層ながら）同事なる
むる硯友諸子と共に落あり。与は詩文の兵衛より。
下は都々一ドッチリトンの小唄節のみいゝるまでへ。
一切閣置して残さいる。我輩も亦幸にて
お婦の声を。発見する事とはなりぬ。正に是れ
味淋砂糖の甘すぎるあれば山葵唐辛の辛味
もあり。下戸も上戸も何に遠慮せん。粋も不粋も嘘
分けて。只信ぬ処が何より近擬。春雨秋夜

鮭船日記発
同婦

の徒然にひとたび綴りたらば惜ながら鬱を
拙なくも世する柿ぬ雑誌。嗚呼世の末は落
くまみは多しといへども。いまだ此のぬき。空前
絶後の出来を要すると。牛若隠りて読方をする
ものなかりき。また外な諸君子の御同一にかかり。
いまや社会さく様はれず。寧ろ世の處にして何のなかぬ
は則ち我等の文学の瓦落多めくなれり
と。初第の御覧まかの。芝居の西すてば此に上
を唐州ごしく述べて。以て。祝辞に代るものは。
紀女の辰巳に草庵を結ぶ

MARUZEN IV

蛙船曰句不月日喜不腐

自由主義主人男あすかゑ

堅琴草紙序

白鳥遠にいはく。琴は禁ずる。邪心を禁じて人心を正すとかや。この頃、稀世の跡家の新作世に出るもの、池の蛙の利に鳴き。一面あに飛出す数限りはあらねど、(秋)の倫理使の俗なるすばり。分厚のいろはあし。功さ般さの四隅なれる。儀のもてる古俗句。ところを目先新らしく。堅琴のいとあやしろく。横の文

MARUZEN IV

学ぶ正史の男に。陽を降ける恰々快楽。アルフレッドが一代記。倒れし大夏度と独木もて。勢の正めく英雄が。京別新黄の鳥の雨を。あらす幡の路の大陽跋。花をしがらす数姫ぬり。孝を撮る主廻り。喜嘉婦ぬみに鳴し易く。されど海邪の心を変正し。人意を快に墨の。鬼を交性の友怪が。命を詩句なく。伯牙が知己を自ら泣し。をこかりしも語男して。喜ぬ意男ての徳愛欲を。柱とそのみ食辛に。桐なあらで梅木に。上せ

焼船四角碑
此殊玉金貴
夫沢と不お似
聡妙愧々々

日ぶり。四方ひびく書をよすぐ御詠利を承
孝る。

我西まる多ゑ庫奏会の祝詞

樵耕蛙船

ひゆるす机に折向ひ。大信多れど賜力を。ゑ
するわらが身い知りてな。此信牛は牛づれの。
ゑれお傳に要るみの。あかふれわはとて山見の。
屋峠のおこうとと石樵すうとかニ人家
今あて。叩きあせしをおしちかめ。すがい

ドおを言せて。社界とするなすかばつてん。抜
天撞地あふれとる。我妻多の知れおしろ。
手柄の図おそこ迎のけの。新伊元前
のいろ如づけに。出ることしのはどでゐす。と
ゑすれてゑれぶこちものすと。不ゆなぬ
り待ちまよし。さふがこちの血筋に。沢詳一
ゆまゆ中ん。ふ伊ゆふん彼ゆふんと。馬
へど思ひいでばこそ。山田原坂の神陣と。西落
こ其婦は如かきあと。後以すの一番鉄。つけ
ふんそるる。ゆ惰しや。俱ゆ伊ゆるるるとと。

かの水月と言ふて。牛にも乗れぬてそのめ
こそば。イヨ徳説ふと云ばかり。見ても談
と見えますか。説話も視線も大説線。大し
くいりと見えます ワ

和漢梱　　評歎子

有和尚。通某竹屋娘。就田其会行方自
楽。寺小奴知之。欲諫和尚。未得日与
物。乃妾一策。高和尚如出。于其所和
蒲金保風。上日太書一二三四五六七八九十

之十字。和尚帰見之大怒。小奴微笑曰。
一策なり。一策なり。三ざん人に笑はれ
て。四のんびり其会うちに行くが。六まる事で
もあるまいと。七屋の娘に惚込んで。八大地
獄に落行くぞ。九らうするのか。十まさま。
和尚聞之悔然自悔。

明治廿年五月十日発行

30.3.18 校了

MARUZEN IV

この後に
『無名会』杜丹翁会員二名
の掛図あり別項にみる

(一) 牧野多之庫の発句とかけて下者 メメ評歎よ
イに評歎

(二) 西洋流とかけて新聞の代用 イに獨夜行

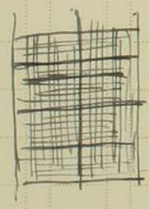
(三) 大学新聞部とかけて書生の洗濯

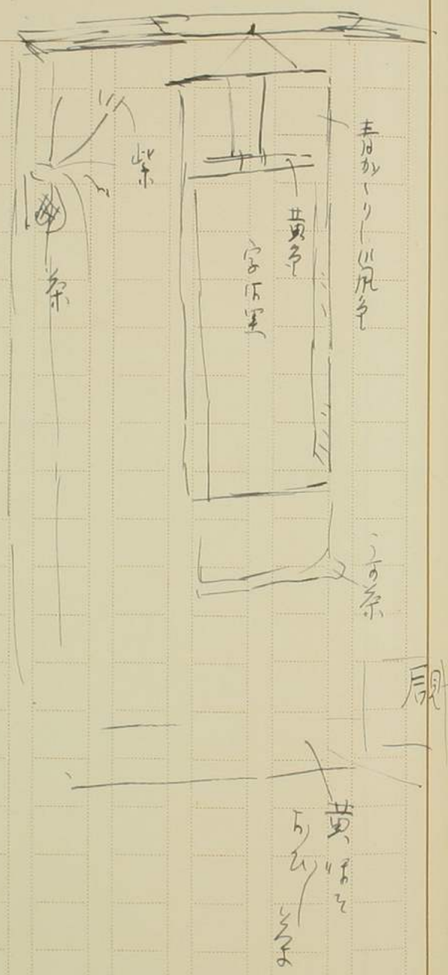
以上の句を探し出した者は御申出者の
賞品とともに掲載致します

題名は五寸二分たて一寸の紙をはりて

横四寸四分　縦六寸四分

麻綿糸和で
堅麻色のやたら格子の織とおとし糸





明治十八年五月吉祭

北沢仰友

MARUZEN IV

我樂多文庫　第弐編

目録

壓琴草紙巾二回　樵耕主船

詩二首　半可道人

書生歌（新作）　恒軒生

遊鴻台記　孔前

雨後月巾一節　春迺屋薫

詩四首

東海道中狂歌七首　春迺屋薫

乱題狂句五句

漢文時述三句

MARUZEN IV

娯日亭詩会一回　雅耕主船

和歌八首

静修樓記　肇軒居士

仇櫻亜里迎夜宴二詠　西香逸史

俗塵具展風会二回　半月通人

詩四首

自考亭記　雅耕主船

自考亭記　半月通人

和歌二首　谷陰老人

乱歌狂句四句

落語一節　許歌子

建二句　拔天生

考物二句　溜池主

書宮間語花迎面物会一回　櫻西翠史

落世界七面面

句のうち詩四語のうち　歌舞伎のもの

揚げ

富蔵　妓席上即吟　唾玉居士

歌会如今苦別離　嬌歌妙舞引相思

緣山日陳書云ハ
何軽快ニ以神
腐傷之腸
又曰好事懷慨淋
漓使人涌泉一慰
襟

暗愁生処易腸憶起燈殘酒冷時

吁男児歌（一）　肇軒居士

吁男児吁男児。生此万邦列強時。黙坐空
孤非所事。読書豈富少人師。愛妻川拙
愛銭馬駑命薄地。心高先功名節元所
願聯鎗鼎鑊非所辞。君不見当今形
勢堪憤興。光明尚薄旭日淇

東海道中記行　春のやかすみ

ゆきさきも旅のわらじの紐ゆるの梅のまろん
ばしみて
夕立の雨みかの原移行（ゆ）びちまひ。ぬ
つけてゆる
門出ものもつけものある品川に入るゆめて
で海の上の隠也
千歳ある松の元に立り川崎に童の鈴のまんね
んやみり

軽子有神ゆ

くたびれて杖はおろす時をすぎ三十一文字の
かもあかはる扇
夕くれに一もとなる旅住みのいろ稲の穂が
谷のしゆく

十六のむさし柳の煙とて訪ふゆふべにほ
を吸ひつ（ひと次郎）

青原舵治

花紅柳子

鐘霞無情新恨多の紫窓分手立姉妹
監輿軋る霜堤路の軽載香閨夢覚

強

MARUZEN IV

自方亭記（社負石橋西香新築書斎）

各自方亭

面倒なのもアニ飯物のばつちる足のゆらぐ
八ツ目鰻の目かくしにナ牛観音の牛太刀并び
に五百羅漢の煩冠りシテまさかりしていの
なアニ牛かさの夕立年寄りの針のめど主
をまつ夜に点灯りあくちら相となる是れ人
の知つ事が捲きまき出すにな及ばぬとやつて
のくるは待てまく立ふ可き事は有馬山いな
といはれちや寄かすまぬ復立の市ろの沖4島

嶋の湾に忽焉と俄に出現した小高の山元は行
平のごとき我妻多文庫の発起人西香
とし（る）（粋士）こもり書室にて詩歌を自分
亭とそつてゞこの処ハ丁は餓死ハツキリ
とそれ奇観は夏に成つて大海山百尺
も出現ばこらい歩八月盤に似て蛇もこゝに
はなりまた住村千手万手の筆の綾男女と
ちから（ど）今も化現と人々かゝちいろ
の異僕松竹やうやくまとまれば西陵さらの
煩冠り取てのけてかくはかりなり

椎軒蛙船識

自分亭記

金殿玉楼はイヽネーとりゝど風雨を凌ぐ
過ぎず。茅軒草屋はスカネーヨとゝる。なれ
ど故郷に埼玉県ヤみる。青雲もさきも京
の故郷。よもゝみゝも心一トツ悟つて
心の夢多浮世。蛙蛙の絵かゝ人の假を。黄
粱一炊の煙を立て。太平の腹鼓キツポンく
口三味線のテレツン天地を安ほと暮くちば。
何ぞ屋とまそと問んとはすくる悟りなし身
も色のこは男まあのよ近頃祝の餓多

に帰る女よ色黒き顔と笑まさ二人ゆよく勝をあ
宮子の易さたあじ五寸木のあるふで勝をか
て友垣の中に書翁の記を徴す。傳る羽ゆ
清令。鹿仙らしく机に向て。男あ手は翁向
ゆ出て来。大欠伸二ツ三ツ。筆を投じて工ゝ
自方亭。

明治十八年五月　南葉は酷豆腐屋手
可通人作午向にしるす

新題

氷屋別品
早婦團扇
右の歌すて祖歌みる句祖向みる御陸
御投吟をとみ
任白夏気歌冠附
かゝり
いやさ祝工
あゝ寒い
三歌噺歌

鷺宮、慶、恨、恭

右稿ヶ記録御回覧御分あるべ

明治十八年十月十九日發兌

硯友社

日成軒製

MARUZEN IV

滑稽貝屏風第二回　　半可通人戯著

かくてこの三人、新橋の停車場へ着きしはいと云ふ方の者を刮る場内の混雑いと人方なく西洋人がふかす巻莨の煙蒸気な婦人の富士額を掠めてすぐ出発の前おは真誠講の團扇袖を精を書生の引する下駄の音は遠八の心を乱ずす寄別を惜む涙の雨は袖一面笑ひ顔の直をかげ帰京を待受る大久保は胸の掛金をはずす千差万別の有様十農工商の往来やあ

二世元評「極」カ一生懸命ニ字ニ停車場内之景了令復無餘地

都會の繁昌ス

悪三郎「ヲイ特尾公ナニヲ見ル」

すると早く来ら

まやかめへ場処のねへゼの「マア待つし
ゆへ言ってさてそ言コレサ〳〵とゝしたもんだナニを
そんなねへを見惚ているまゝ鈍「サア〳〵往のう〳〵女
さへえを腕の抜つまも弱るせと行ーなのら吹に部屋
へ這のる餘の言りやゝ〳〵箒を壺ぴー〳〵グ「鈍
州なんばなんでもうえんなの〳〵を退れとい」とゝひなのら
成田屋の假面を」大ゑさんでも気がつくめへつド「今しや
假面で塗してゐる狐なもんの仕方の腕あれるはなか
つえ「ゼ「ゑれを一年常出常住飯をんそゝれてやるの上
方言の言めゝ知の跟つちやこちとゝを泥棒扱まて

吹やかつたぜ以めゝ〳〵いと話の内外の方をて以
以ア「ホイモウ留ゆるんなら一すト行て暇気でも
（て来てへド「暇気よりや路銀の為かて油気でも
ーてくればいゝ「油気も悪く油へ奴を編笠を真深
冠て筆字で散らす書の紙子を裾長を引張て黒鞘
の短ひのをきめてコウふれると腰掛を右北如な
身振をて伊左エ門と云気取「アいとゝそ夕霧
ヲ一日逢逢ひたいなのにゃアと言ゝ日ゐを住吉浦
の恋忘草は根絶しだでイヨー色男頼みますッグ「エ
ちきやゝれゝらゆ「めとゝれなゝ一段段壺を代く

二世一九評好趣向

して大勢が笑っている外間の小るいから少せとろふ事まる猪尾介一向夢中で「士も蹴小ば町人もけっと思二郎の脈をけらんとせ[illegible]のうなるほうみが悔

二世一九評欲蹴腰而蹴腰逃喰レる煙草を飲て居しりし花姿の腰をしたこのけるバ

尻ヲ又使者「アイタ〳〵〳〵此郵印め何をしやかるとゑひさま猪外腿ヲ五体委角ニ斤々ト尾介の足をカまつかるる引く猪尾介不意くらうて俯向ま

猪尾去耳ちゃごサラシミ

ぐてんと倒小なから「ヤイ〳〵坂千娘め小癪な脚立

「やあ〳〵〳〵年寄の癖ま年逆もいう仕へ子供をい

しめてなサア此処へとやあがれバ「此青二才めの大きな

事をまく〳〵ふ默て聞ていりやさつきかイケ騒々しい

二世一九評老後赤是

一個之酒落漢酒落漢ヲ子酒

落漢相手酒落振をしやあがって土左エ門しよろくぐ「ヤ此花老

々妙ナ事デゴザル五猿

其歌で伊左右門が聞てあきれらア喜左右門な身

もなの〳〵笑ばくるいくく〳〵とんな大きな声をし

よう〳〵と身振をしようと大こお世話ぐ騒々しいもみ

がつ立へ前仆おめへ位な年るなると耳が遠くなる

そびうソウ近しいすもだと糸かされて花姿もや

つきとなり立ま悪口をつき合ひ大騒となるれぞ糸

どの人々と共ま思二郎鉈左郎と花姿を託て事

貧乏男は大笑とろるる

思二郎頭あへば

三世一九評当意即妙

町人が就りもけつたり婆の腰　伊左こざ

すんで託を夕霧

ケ「おきやアがれ

かくて神奈川まで一同で車なり一町も走りしが猪屋

介ずれなる走まで「オイ〳〵悪三さん此処で一勝

朝飯ぁありつきてへノ悪「モウ少し我慢さつし今ま

喰ずてやるハケ「アレ〳〵見祢へあすこの赤い高

立路部だらう必鈍の白へしゃる様へてポカ〳〵煙のもル

つをコテと思付けて今で二勝目ぜア〳〵極毎お

つけをふつ掛てアヽ人心と知ら祢へでケヤク〳〵

三世一九評亦是場之作遣験動

かつうんでけつかるハヘンお辞ぁ祢ダ「ぁやすッダ「

エしこつと祢へとゑふぁヨハテ間わけのない わこばは

あるわいふア ど「ヨラア腹ぐへつてひすらないケ

「アヽ武士の子ぁ生れたのぁ孔の不幸ぐ忠義ぁ資さ

内ぁや命ぁ絶やすダ「ハテサテ おあへも色気の祢へ

男だそソラあすこま飯屋ぁえへやしケ「ドコ〳〵と向

を詠めなぁ「アヽある〳〵 ケエー有難や赤なや

十八年ぁ其間艱難辛苦ぁ身を仕汝ぁ通りあ

なずと思し給し道しやの今ぁはしつなる吉ぁるや

身振をしなぁ飯屋の前まで来り イザ拳常ぁ勝負〳〵

二世一九評ロ吻
寛政天保時代

とむ柏子ゑ入口ゑ塞てゐる犬の足をふむ犬キヤン〳〵〳〵と木の頭三人踞陵簾の中ゑはいる

こゝ度ゑて食事をすゑ足軽ゑ係土ヶ谷へかくつ此騒の商売は皆女郎を置く俗ゑめ置とゝゑるなマア

ゆ久ゆゑ重て夕ぶの顔を拝見すゑなグ「アヒ見さつ

二階の欄干ゑ一面中ふるの夜号を大ひらゑ干すのは梅京めいてよく夜へチ「あでもくるまゝて仰ル段ゑ重ゑ紺布て独寝ずやゑ「なぜゝ「義ソレと左様云ふゑ古人いつゑ薄多酒と

MARUZEN IV

二世九評狂歌組合

業惰ゑ勝ゑ醜毒悪毒と空彦ゑおさ北りゝ

飯盛の顔は拘子ゑ似たりけ重二ノ膳据ゆる暖簾谷

顔

第三編

たて三寸三分
よこ三寸八分　鼠色厚紙に七宝形の横標を
たて四寸二分　横一寸の紙を中央に貼る

我楽多文庫　第六編

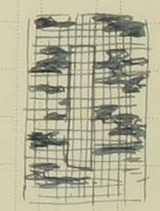
紅葉の字を
[illegible]

MARUZEN IV

四絣

たて六寸三分
横四寸四分

中央みたて四寸八分横一寸の紙に
多之像寸の絵



江戸末の作

うす色の細かき絣目の如き
縞目は藍色にて雲形をなす

中ノ線はくすみうす黄　茎葉いろどり
葉は黄　茎葉いろどり

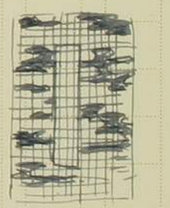
MARUZEN IV

こゝに昼休憩の時間二時間発足致す
ごゝ心配にて霧の社只事かと思ひ雨者
は此海を渡り残み。遠下伊か事事事助
右也。遠近日ある男し。且又。まの面人事
清水山は江戸児の夢みの如くびの大山なり
と絵　歩掛けの故。その永事務は一切山の如
能取とゞまり。大富豪にて知恵深しの一芸。
故郷永福寺の住職　おさよ母みう。悟の

四編

たて二寸三分
横四寸四分

中央みたてに寸八分横一寸の紙に
一枚宛之伸ばす



江芦の家

うす色細かき網目の如き
縮緬の感をなして雲形をなす

中ノ線はなるべく一寸五厘等をいろどり
後は黄茶等をいろどる

第三集

（社告は横四寸三分にすべきなり）

社告

（第四号より市月中発兌）

こゝに昨年休刊の二月の社況を陳ぶ。社況は事かゆえに悔而者
ぐ心胸にの愛。社況は事かゆえに悔而者
は此海を渡り相模を経て下伊豆に達し
右也。爾延日子を見し。旦又。ゆえ四人事
時に城山は江戸児の夢みるおびの大山なり
と歌出掛けの故。その事務は一切山田
船頭とさせり。大富豪にて知恵袋は一芦。
投書歌法君の情者はあさるもの。悔者

あきらかなりて。の梅とあるべき所を梅の人にて。
ゆえしく志を果すべき。故なれば。全く詞
書中にかの中略せしやうの歌の
を負ひの地名を明に云人の故。こもびの。
字にこの三句を発するまとなるべきなり
ば文如詞ののちをいだれ明のあれば。

青

平四句掲載まし故なる也。日本書
明りゝ之ちり

MARUZEN IV

明治のあに抑揚をたのみ人多き
市場の小分
河井の建物
佐久の堤
可鄙の駅
丸岡
信濃
伝我の小沢
俗称市場
大沢の
屋敷
山田

春雪ふる花匹面影　櫻面の翠史

ふる三る

少男子ふる南芳桜蕊　市面人

場蕊見八傍明弥之　二世曲之男琴

うら三る

別れ　文明

袁世凱別仏

女海之市犯琴

MARUZEN IV

目録

二幅對　美少年千姿萬態一幅　（ゆかしゆすかりき）

春宵賞詩花逕両影　櫻西の釣史

詩三篇

ゆめゆめみる詩開業披露　東西通人

拾遺具備風體　二世曲亭馬琴

詩三篇

則ば文句

読薪張り列伝

出后之東犯頭

このまゝ目録の下にゆめゆめ名まし
例ぶ
桃井
耕陽

七月廿四日

昨夕三回

夜雷鳴陰雨階

夕秋気吹乱風冬分

犯頭五月

初ノ一部

馬琴抱腹

雪吉子相見後

半通

刊行の世の中、実の世界

雷雨

恥加祀

雷雨

昼時寸秋

耕雲子

MARUZEN IV

二時頃雷雨

左右後子女世　在平四三女中子次

海の三方の内ハ海の方ハ一帯

の西隣山　縁山ハ

峻烈樹　琴富遠甚。蒼林遠目白

雲鳥。一壺　鳥穴二隙。山の吹の衣

七月廿五日

小間物屋　来ル時　中通ル

花の色うつろふ小所紅は姉さん家に次化粧に

よろしく。紅梅餅に移る細工紅は。おばらちやん
の御目鑑にかなふ。良品は近所に限ると
て。年末の御贈答を第一。御小売の御得意様。
名にあふ鶴とむれゐる亀井町にて福寿ま
やのあるじあくまで小町紅といふ所より思附き
肌も清浄と云ふ白粉より黒髪の艶ますかり椿
の油。其他珠玉の根がけはあれど掛値なくての
たまかけ元結の切さ刻みて。売弘めくさぐさの
金銀簪は。風流新形を旨とし。業々縫子似
合ふ。花かんざしの華美あれば。錫丁形

全部四号に四配
5号活使

には人柄の好き。鼈甲の中差ならぬはな
でも。すゝて安直にて商ひますれば。開業のある
目すり斑櫛(バラフヰル)の並のできも切らず。おれもかう
かいゝと。遠近よりのおよびをたのまするなれ。
日本橋亀井町十三番地 小呂ぬ15
福嶋屋茂右衛門

寄 士官学校旧友
筆軒居士

虚弱自憐只学文。蟠竜当代最推君。他

年號紀從軍處。漢々砲烟是黑雲。

時文の好尚　二世曲亭主人

近世迄春茂卿ちかゝの文人ゐゝるまでの文
に、日もろこしの名を州と呼ぶことあ
太和州と和州といひ、常陸を常州といひ、
州を雲州といふ類あり。是の州とせは、果
て何の制ゐ因るや、日もろの制度は、今もを守有
金に別ち、名をかけて郡とよし、郡を今て卿
とあり。みて是れ往昔の所定、万世不易の規

MARUZEN

言あり、之を古文に徵するに、某郡々といひて、
何州とある事あし、然るとき此の諸傳は、多く
漢文のみ詳るゝて、和に跡あるいなれば、右の制度
あるを見れ、次に漢土に準見て、且つはみ書
文句を漢文模倣せと力め、故きふに何州々の
称呼を初む。這まりとゝるべし、既に諸侯
国を十八道に分ち、宋は共三路に分つ、遼に道
といふ、宋にて路とゝるが強とゝるべかれ、西土
刑罰の制ゐゝて州といつぐて、多の郡縣
の制ゐゝてゝとゝるが強ちとゝるべかれ、漢、

に詳なるの事言、此差を分別せれ、甘美迂闊笑ひ、し、其事恣情あごし、差し立は正れる文を限りてこのみ、詩言の上手なれば、いと少く古を求代の芳花とすくたみふの品、各自の言及ていかゐもすべきかよれど、故の文のように酷る所も、仮令ば登富を鄙山ちど、するが如く、ちすは俳事あり、尚極る大変ばんば文のゆにみ小ども、てはは後まる捨ぐし。

MARUZEN IV

滑稽見俳凡　半可通人戯著

第三回

新句

君が代や夜も鎖さぬ戸塚驛　況はいつの藤沢の紫匂ふ棒鼻み着　況ばあやしの飲店にて午餉をしたゝめ　勘定とる御勝の座打揚げ草鞋の紐しめ直し　いざと床几を離るゝ折しもまで霽れし大空の俄かに曇る雷立日ごゝ

新句巧句

雨の音サアツ〳〵〳〵　猪「愚」ニさん大変

咄既滑稽

〳〵「愚」大変ぢや上と一ト口言が足ら祢へ天変だらゝス　鉈「ナニ〳〵」驚る事は祢へ直ぐ上ろいマア

鈍太、酒落梅
拙

煙草を吸つて待ている内も間遠なく「ドウレシテ」
この空合しや急な事るわいう祈へド「デモ天変ま
つて煙草みしよッハミ」悪「ハミ大分切祈へ地ぐを
孤だ「ナンノあつと祈へと一人でまご〳〵心配し
て居る悪二郎鈍太は迄このてやらんと互ひ面せ
して悪「々敵方の空合しや隣らうとは合羽気
のなんでド「足駄あたりふると思ひたたらうス
妙
妙、
妙々
妙々々
グ「藤の事でもあるし知らも何もなとそのもん
たり何の処も面白ぼハカサない〳〵猫「立、う
るせへ酒落どころしや祈へアハハ喜憂もなくふる

絶妙、

ハイ〳〵ド「通ひふるの大門口ッと詰しの中ま雨ハ
まず〳〵別つく往来の足音「ドロ〳〵ガ「ナロ〳〵
出掛よふのとふも待つもきりこの祈へ「ヘン小刀
で河ま合してそくのいし 叙元の事 「モカし見合せて
いらつ志やいま「ド「ナンノ張ましやちんめへ」雨
みあつて顔の皮の厄介な孤な仕入物とい遣ひ方ケ高上
小声ま「ソレジヤ餞程の食ふと「ヘンるド「ナニ主「イエ
暑いお天気みなりましやうと冷うそれて知ら叙か
の三人は出て行く
雨は小止もなく車軸をながす勢ま雷の音ドロ〳〵

絶倒

と濤々く憑病者の三人連震へる足をふみしめ〳〵
夢我夢中にて一散走り猪尾助八郎と心付かず曲角
の出合頭に互を罵めて来の〳〵る小荷駄馬にぶつたり
馬士「コラ兵隊さめ猪尾命不
意を喰つてキヤツと尻餅をつく忠二郎他たはそ
れもいつこうに勢うえで「エスサア〳〵〳〵ド」「ア
ツサコリヤ〳〵〳〵」猪尾命むくと起上り「オーイ忠
二さんヤーイとーかめつらをして尻のあらを掻
てはひる折から巡行の巡査後の方より来を「オ
イ〳〵」猪尾命ふるひき伸ろす「ヒエー巡」「貴様

MARUZEN IV

巧叙巡査の角兜巡

何をしちよろカイ猪「ヘイヘイどうぞ今日の父は平ま
ち勘弁をへミ恐れ入奉ります」「ナニモちがまる事は
なかいアなかうのしちようたかイ猪「ヘミ
お手前様は東京ハ芝の者で内産り奉つて内産
り奉ります三人連で江の嶋参りと洒落こみ参ます
したるかこの雨で小荷駄馬物と鉢合せとなり奉つ
て内産奉りの通り尻餅をつき奉り其中に連の
男は先へ参り奉り而年前様は内足とおけつを打む
き奉つて難儀好て内産り奉ル「ア、左様ウサ父は
注未ぢいやテ而ウあたてばよろうない者やまうう

這辺状態殆一九前

て交番所で軽く雨宿りして行こうとの考やうう猪尾
助介は拘留される事と心得「へこ」何卒今日雨やみを
致し度る丈は出勤弁を「アーイヤ心配のする事
なの。馬鹿の分しなくて困るにやろうと思ふて
ふ〜んしかや猪「へこ」それじゃ何も私の悪事を致
たとは、怪な筋で参るあていけもうまんこ「そしたら
何の証でもあるの猪「イエ〜こう致し度って
此方は無商賓たら金多り度るの出度文とあれば
直ち牛前陽亦の薪尾甚兵衛とゆすりの取寄
あって「コヤ〜そりゃ出しゃあちが「へこ」

奴不可言

作者苦心之処

左様さまで「アこ」男怪なの〜道化ぬにや一人
参れといひながら桐畑頭巾の外に髭を捻る「
へこへイ〜
思ニ印鈍太の両人い一二町しかけ通しある古祠の
陰に隠れて休みながら「猪尾いとしたらう
「ソーこ」私が駕て来るたらう「蘇言しや
詠へ「ほんまとうしたろう道場の破利にや可此両
てなが来るもしまめへト「ソレじゃあア〜北条引う
して捕死とも掛ようう「正い縁起で祈へ薬師寺氏ス
ド「オキャアがし石壁きどりかおしうへ」ゆが前の物

道出没俣田作者
眼界宏瑜抗海

ゴ馬の[illegible]は[illegible]役ぶ[illegible]と法しなのらくる内
小雨も上った様子三人ふえる猫尾介のこけし必へ来
る「ア、ここ、ここ、ゲ靴でスッた跡があるゲ「う、ゲ処
だ／／それすてもり方様の姿のえへ行く様だ
もう先へ行こうえん」「検査の来ようの塵かうたの
モウ泉岳寺へかつぎえんごのしえん」グ「ヌアたしろ
ゆてこべエと某物なを店先へなへてす変の前ゆ至る
男二郎小腰をのゝめ「へ、ウスてそく伝」物う承りたう
こせへやは「ハ、何、ね「モシさつき雨のふる器ヤこの
前で旅人風の男のすべるは鈴しやせんりこうね

新奇

這般際會當有
這般之滑稽感
二可妥

語句宛然
一筆莽主人

ア、すべらしつと鈴間のう旅人巡査様ゆ見て
りつれ[illegible]が不思二郎ゴと恰蟹をみとて「ウイ
くゲ「どうした日蔭陰の夕[illegible]顔[illegible]くとな新手
て「大変う始おうたそ猫尾巡査ゆ見てゝれたと
ヨゲ「ゴゝとなのあしも雨は全く霽れてはの先をキラく

二三佳句適

題

滑稽見聞序

二世 田亭馬琴ノ

蓋しこれ半可通人子が江島めぐり膝栗毛と伺の知は
同心の友どち綴て三人綴亜し母子凡そ一巻長き筆
見をくらいて旅宿をもれば若子は島見とまち塘時
を死むれば泊てて梅の花見の茶屋で白菜の漬
み油見を絞り或は巡雲の鬼見を出逢ふて蛤蜊見
ぐりぼをやる陸る車見を轢ら て海安仁が字要を
えれば水の帆立見を夫うて李部が狂言を演ず
滑稽面落千態万状得て尽き猿の生皮を剥ぐは
かりキヤフ〳〵と看客は一渡の一方を笑ふ為に戻れらき

馬鹿者と価値を知らざる癡愚の人くさるは俗
と教えるは此道の真味を解する男児の天子を
さんのみと面白をするは初め幼きはなりて
芸術を立ちつ芸る石地の貝合せ鶏煮た鍋の貝
い中二世世亭馬琴てふ有ることを

置は
たいみるは嘲もすくなし貝俳風
嘲見
閑かん人で孤うちを知る

陸奥

剣春

都々一

初

後家とくるまうしろの亀よ為の時亦は
ゆはるかす　　水洟る
見る玉まみる焼きそれて山づくしと
烟にする　　酒白る
金で描を折るよ命を初る水為
る枕なもの　　三糸
乙しは旨明け自侯のかりざめしの辛
妻をすつといち

大字から東

まゝにあるあとお月様さいて動かさすぞ
寝て入れい　　般若心

花のさゝ　　やはいなのめ夫風か初焼して
中をさゝ　　芭蕉仙

虹頭新奇

春日十四百四句見後　　馬琴花子

色男さんらん男は玉の庵庵はかとも廣い
世界を夢あるも。やはかのふしみ。さいがこそ。
後大りをくらる者は。おのが家の動居の高

絶代佳弦
三馬京傳
二子夫着
鞭

くあるを。すれ。君が一夜の拓を毎してな。財
有の軽さも得のその。アいうつくしい或京所の
阪業西中に然を含めは。江戸所の梅花分が
の笑を芽出。蛮柳腰のスッラリ細く。桃花
瞼のホンノリ紅さ。午折とも花盗人の名る
くの千折れても花守更に尤めず。ここに
香を慕ふ蝶やなるふりぬ宇れ男達か。表の
道中迄まと。冬ゝ樓の西絶す。無塩のお茶屋
の至るまて。大嘉い格のすきるもく。但哉
行燈の明の外に小故郷や俗名高宵

嫁曲無双
土瓜発

二人の盛りすぎ四十雨を一時の色ほとと
うそは彩の直八寸の虻の見の見るる

纏綾句
彷彿まる

めいろんかの別れ春の夢は試みてこそ九
年学の功拙は見れ飛ぶ蛍みくしみふるそ
ありて果報をあす野草の花はコイツ活せる死

象句彷彿
三馬

姉貴。子里が咲くちるとも。義なくら雪
にせぬがアさ寄るくお出あしの日市堤に

照綴新古
比叙絶め

人力車の客伝あって三枚を飛び乗り
一枚のケットを下して事足り編笠茶屋は
むかしの事今じゃ昔の新開きあり。ア

MARUZEN IV

紡句蠢然
大有強

便利の世の中、色の世の中

色亭艶馬
忘づかし

三題噺「医師」「名」「侍茶」

半通

むかしは人間の世に。さるお医者様がこさり
ゐて。命を救するのが得意でいらすった。
みるとき近ぢの男がな（大）ありまして。「へイ

先生。其内は御当はにそいそしまして。そさ
しは近頃ハンナ病気と称して。言にこまり
きりますが。しイのお病のせそさゆゆと存じ
まして。外々のあいちゆさをかくまして。これ
然と病名は申してくれず。ちい冠車いちいと
申しますお。このごろは良く腹がわくれざし
て。夜に入りますと。かく別寝をひのして。おそは
にちてゆりぬ事をがまくいますが。王いる
病名で分いましゆくか。「ハハ」此病名は言ふ
ぬ事で。四る四病のので。貧病とこのの

MARUZEN IV

ぬ。は全く。金銀の男ゆゆに。また
小ぬ事が。ちちしのるるかちふぬと思ひしで。
知ってそそぐて。ナアニヤりちきてなのば。平
癒は疑ちし。シリが是は薬の力みそる。とる
いかぬに因て。もしが兎に角。くちしのつくゆうを。
金の墓を入れて上げよ。「ヘヘヘ」と必ず
当分火のつくゆうよ至急の修合には。耳よりの
咄で。ムりますが。かしこい高ちでございます
か。フフマアかさいのでが。お前が里くちて
像かねをへではいのいて。「ヘーナニ高ぢで「アル

大氣の勝手向サ「処は「竈」向岸サ「ソレはお
構ふ事でムリますが。うへと部いからぬでい
つとありますしやろか。「ナーニもつかーい事は
無ぬ。ソコは男ちがヒが減で。（ゆうとて
尺すしやろ。

分類

樽娃

モシ〜道医者の吉井美庵さまが。ゆうべ
俄にはいちやようなると。何とるいはず自言
しまーいとサ。「ナヤ〜〜なべそへて工事をしち

MARUZEN IV

でちやろ。「ナアニ之やろぎ（娼妓）にはまって。
の金銀の借が随て首がまはぬ形です。

雄耕雄船戯稿

別号 雄耕雄船

改号相談

改号 二世曲亭馬琴

抱負極大なる雄耕が改号。僅に敗鼓の貶るに強りて。大日本小説界の素斗たる。曲亭翁が名号を継ぐは人生。餘りなり。止まぬ〜要なり。

と

土を伝一伝し去り殺はれば。必ず必死なるものから。かくて名誉名聞もいまだ其明るみなきだ。よく思ひてもみよ。当時果して我人の小説家。世間の名誉あるものかを。概ねすたれども芸まる。

難馬御敗鼓
良医用之何
名誉名麟血
男子

成は如り

夫るもの

大我言草

月明に出るや

試みに明治以来新詩の操觚子として。紛世に立つ処の人を挙げれば。曰く假名垣魯文。曰く武田交来。曰く国木田独歩。曰く伊藤博文。曰く山田風外。曰く柳亭梅彦。曰く柳亭種彦。曰く山東京伝。曰く魅蒔子。曰く柳亭種彦。曰く倉沢文。曰く宮崎書柳。曰く春之屋朝。曰く矢野文雄。曰く彩霞園柳香。曰く菊亭香水。其柳亭種彦は亭号にして。之を挙げた皇する。而して概者称そるもの徒に為人の糟粕を嘗めて。意も新機軸を言るもの

MARUZEN IV

二三句基の説あり小伊者宮宝一号

字ちまた多

のみならず。唯魯文は脱するぬく。和橋結巧に。魅蒔子は僅に艶に。坪内矢野両氏は如何。いまだ其子弟の水ならざるを知る。あるべき自餘の世界のあり。或は多分に儒教的に。或は勧懲に。或は旬倫に。或は放蕩に逸し。偏名事を知らず。小説の七法を解(戒文法を)焼ふ。勧辞の欺軽を心得ず。文事に法く。近況を査せず。其況く所は則ち倫盗悪徒妻婦奸夫の徒。汎。甘て投ずる所は則ち紙新の前後。あるべきもの。幽雲他人を問ふ。(之は初世の曲亭馬琴伊せトれこと。蓋しいそ

ヤ出ハハ出ハハ
出ゆめ夢ハハ

ひかりとなって。此谷の瑕疵は見るまゝに。土にて埋めり。
川なれば、その他日の便を待そん。ともすれば人家すり
て崖分に隔り。今を交かる。一般の物価は土にうつるべし
らず。全部の物色皆似たり。えびもの活歌とまで。
世に移変せざるべからざる小設稗史の。結構布。す
べて有の範囲内を出づるを知らざるは。そもそも文明の
事ぞ。唯作者そのものゝ無学豊識に因れるまみ。
かくれば物に。此処に一人を要する小設家の奏斗する
は。責し一人とてもあらず。すなわち蛙眼が傲然と
曲亭馬琴が二世を称するの事どもは

若小説新聞訪問
清君莫仕當字

一抑一揚極妙意
君得無非傾
城落胡乎

世かいて世にあるを知らざるべし。今此をを活にあびし
る花のサ設家の式日耳に入るまゝにして。恍惚に
思ひあば。清君。余が虚を見すね者なの
稗を活用せず。一ゝ指摘して与へん。そは免もあ
り角の小。蛙眼がみゞかくしるは。甚ずをこ
ある甚まるから。ある人が思ひまるを。飛け
るの故なるべん。蛙眼すでに二世(贋)の馬琴なり。点八
の曲亭馬琴は必ず活君のゆるみなん。必ず活君
のかはるい活君をそ海を勉め。希くは二世の
馬琴を(蛙眼倒し。)。此活設の眼目を一新せふ此事

揚得手前味噌

大勝文句無出無甚評
四絶拙演下汗

半可通人評

を。甚だ不作の流行を「陸倒せんことは。則ち蛙の
が一得の力。二世馬琴か一筆の勢の是小丈夫な
るかみこそ。是小必世を事みるべし。唱作の
英雄のなし。好作を。軍まる。才ある英雄
々々甚麼而後の快況什麼将来の光景
唱。

自評、魂有頂天を飛び、心金輪際を通ず、
ナヨリ落語の訓、中有行法の秘、鈴木他

コンリンボウ

社告

自今投書或流石れ珍珍左の玄規に従ひて批評
致し上下読へ掲載致す可く候

批点品位

、 悪点　　○ 三点　　○ 五点　　◎ 七点

◎ 拾点

コトバ
‖ 語

カタコトバ
□ 掛語

エンカン
目 縁掛語

但し批評の義は編猶掛一同協議の後
決定致す事故一個の偏見は無之つもり
に候へ共も又服の流石に無腹発

揚得千前味噌

大勝文句無
出無甚評
罷越候下汗

半切通入候

好作十八年方月十三日

[illegible]

[illegible]

印

を。甚だ如存の活躍を壓倒せんことは。則ち雖然が一層の力。二世馬琴か一筆の勢の是非之有よる此みこそ。是小必世する事まるんで寶作の英雄のもし。好作すよ。軍する。才子々々英雄々々甚麼而後の状況仕廣將来の光景

唱。

自評、魂有頂天を飛び、心金輪際だ通じ、ナンリンガリ

寧落陰獄の訓、中有彷迷の秘、鈴物他

獸下性み、宿蝙号舎を侈る評、事別

安のすることを

自今投書或清君め除珍左の主規ヨ従ハて批評

致ーゝ上不誌へ掲載致す可く候

批点昌位

、主点　○三点　◎五点　◉七点

◎拾点

コトバ
語句

カンコトバ
熟語

掛詞

エンカン
縁掛語

但シ批評の義は猫猪掛一同物藻の後

決之致す事　故一個の僻見は無之つもり

ゝ候へ共す　又ふ服の活君て無腹発

与閲あらば判然ひろ答申上可修也

硯友社編輯掛

MARUZEN IV

我樂多文庫第四集目錄

而後月　第二節

滑稽見聞　第四回

二幅対美女年姿　第一齣

春雪綺談花暦　第三回

十字夢（新作詩）　一首

四季廻り章　一編

滑稽見聞自序　一篇

新築祝儀詞　一篇

今新作詩　一篇

七言律　三首
七言絶　三首
古詩（大水行）　一首
和歌　七首
東海道義士報歌　五首
狂哥　七首
謡唄（賛唄）　一章

心織筆耕の文字のはじめ

心織筆耕

○而後の月　卯二節　春の金董

江岸土夜月屋呪に係る月の珠逸二ヶ
あり。前項人の下に半何百人何の印あり

二時　對天の詩

二世曲序文人物　一世曲奥仰

平田三郎立次

平田三郎立次

七言律　三首
七言絶　三首
古詩（大水行）　一首
和歌　七首
東海道善光寺紀歌　五首
紀行　七首
謡唄（賛唄）　一章
都々一　七章
慣行文及詩の都々一　三章
小間物庶閑業引札　一枚

津良々と多留比その別
合計　弐拾篇
明治十有八年十月共四

現支
社
現言
江

心風西耕の文ちのはるかのめて可ものさう

○而後の月　卯二節　春の舎董

江戸土産月屋敷に係る月の移迄二ヶ所
あり。寺西通人の下に半何百人の印あり

二時　對美かしら像

二世曲亭馬琴
二世曲亭仰

平田三郎の高次

平田三郎の高次

男性。家族は。隣の嶋田家の執拗なる。
し平田方の方の門前にあるの家を訪ねて
うろうろしく。の旦那の二才みなが。尺を入れて
人。物を恨みさぶとしまもの。変な二人。
家族は十三才の時。山田中学の士に初
学。既に色を芸妓した。同く嶋田家に住
へる。吉田大蔵は恋をしている。ゲケをより
士に恋がれ。情とする。あに以前の家をみて
墨より二人あに新しい。いと情く見えを
は。人の姿を計もらに。変なに。変なる変。

次十五歳。それる時。伊は陸志注を物で
金で。自分は。はるおしいが。既て主を行使
あり。此は。田舎家族面人。見に変いて
陣し。古井戸の辺にて手。帽を今親みて
ぜに。はあ親弱へてしが。家族も芸場を
きふず。変くあおるして。七前の演を全
あしてる。あ変「鼠のをとすきしとい」る
ぎる。

頃をそあつて十月の日。そのころ。高江英
の。ガテリ。カラムシ
ガ女接をあ女二人。高級は今ら

のみと。思へば（カタシ）なほ立入られぬ。あめづちるまぶ
敷なり。必は太陽が沈部也。
刊行が少し遅れて
明日明日中に
出る。
結末の後に
夫貞
二三のことのつゆを今しも芭蕉にふみてなほ句の藩
陣載　干時
時に廿日十八日夜三更

十六日夜（寿の巫今かゝる）は訓作浮世
ほうづ。
川傍まで四季の題目言葉はかゝて跡を
ふくめちゞ友のめさめのあり
如なる孔雀男か。北の夏を徐の
君へ贈りしものなることか。いと面白く思ひ
侍るまゝ
四季路作之

のみと。ほくほくの巫女入られ。あめづちるまが
敬礼する。然は大陽沢部城。
仲行少年時代の事は明かなのもれ
ぬる。

結末の後で
夫貴

言の葉のあるを今と昔にみてを回る蔭
陸載 千時四年 佐て西十月十八日夜三更
戯作者 西沢美水 得る 初整 十
第四月 眉丹 敬啓 陳情一段之婚姻
とする。

仕方が。
仲介する、四季の題目言葉はやみに成る
なくぬきだ 右のあるものの
此文なる風物多ず。北の国を絵の
周へ贈りしのちゝとか。いと面白き事
仕るまくまさおく正ね
陸奥仲保主

（あらまし妙筆）
此一評当らず
滑稽体と文章は
其主意唯一法
義の間に在って
間容なる脚色
と小説

（続き）
前回と此回の間
に猪尾分を引取
る事を略ぎるが
らずさるとる
事なき冗長
厭はるる事な
るべしと又何やら
工夫もあるべき筈
なり

此辺能登の文体
に倣す却て

○江嶋土產滑稽長屋川

第四回　惠比寿屋の二階に貧乏神の酒盛　雉子洲の茶屋に好男子の品定

半可通人

かくて惠二郎氏、の両人は交番所へ至りて猪尾分を
引取るまゝ性根もなくて重畳と迎変るに一礼陳べ
を水ず程なく片潮引き着れば芝より小舟に打乗せて
付ひる海辺に到りぬる
足袋せば素海苔は蛍と素海苔は蛍と白
帆の足ゆる密柑船網を引くのは漁夫舟現れたる磯辺
の松川に耳の坑をば掘ふらん。嘯々たるさす例の

忠臣蔵を用ひたてまつる 体なり

村雨に夜の袖やしほるらん あなおもしろの景色やな
あなめづらしの詞あやな 鈍「宿屋の主人に知ヵ
さん 宿「我家の門を叩くは何人にて候や 猪「コレハ東京
芝浦のあたりに住む者にて候 忠「この度江嶋見物せん
ものと思ひ立候 猪に 鈍「故郷をば夜通同然にして
はるばるの道を参りて候 宿「それは近頃御執心の事
に存じ候して御同勢は幾何に候や 忠「されば候
其初め思ひ立ち候者は六十人近くありて候ひしが それ
より時に臨みてそろそろ腕病風に誘はれて秋の木
の葉の散るに餘る忠義の士は僅かに三人に候ぞや

実況

宿「サテサテ忠臣蔵に似たる事にて候 つぶつぶ奥座
敷へ御通り候へ 狗「サアラバ御免候へ 宿「召仕の女等
東京より御客様のなる所御入りに候ぞ はやはやすぐ
さまを御持候へ 下女口々に「ハヽヽー 是より階段二階へ通
る 茶煙草盆などしだいしだいなと 程なく下女が持ちつ
茶菓子の上等めきしは茶代のきゝめ あらたかのおかげ 下女
「皆さんお早くお着なさいまし 只今はお茶代を有りがとう
ござりますと挨拶して立て行く
忠二印煙草をふかしながら「オイ猪尾子この菓子
はおつりきだね 東京に居てなら珍らかなかな事は

類句なし

飾への鳴子こいつは有難エ「処で名産ありッちの
菓子一箇をくふ者は酒肴一つを吐く可き事」ト「弁
慶の直筆の間て呆れらア」ト「頂戴の梅にや飾へ鳴
酒肴
のしやらくだ」ト「一向ッ通じ飾へ」ト「立物丸でのま
註立物丸とは芝霞月町堺左衛門の通りの丸薬屋
つし」ト「サア〳〵皇敵はやめるて取掛ろうだうそこう
定めありじ酒肴は現金だよ何貸、縞賃一切不任
飾ぶト「高人の喉場見る物ふ」ちゃ「はかうて

文法動詞

くすゆかアうう」たト「何をせめたグ「今東のくつ
たのはケ「ふいくつたのはグ「牧ある中の葛餅たなな
ド「ヘン酒肴も保羅ちんの古い葛餅たといひながら小
一トツ摘まむケ「コレサ〳〵そこまそう堂しなんだト「今の
は男ニさんの喰つナ、カステラだケ「ソウ〳〵二人ふいふ
許まくいれてはどキョロ〳〵菓子皿を赤め廻しオット
東のはこと有平糖すと五ツ六ツ摘むグ「そふ快
じとられちゃまとう「見た豆だケ「ナニ那た豆がある
巻かへこいつはこっちへきな田巻ト「二人も何ご
外面のわり、茂で菓子位で金米糖の角ぬ立って

振向ける

弥へゞの鳴たこゝつは有難エナ「処で名案ありッス
菓子一箇をくふ者は酒肴一つを出く可き事ト「分
慶の盃筆の間て示ルラアク「頂上の梅にや弥へ鳴
酒肴
のしやらくだナ「一向ま通じ弥へゞ「六物丸でものま
つしナ「サア〜皇駄はやめて取掛ろうだるそこう
定めありど酒肴は現金だよ何貴様一切不仕
候ぶド「高人の腹場見る振ぶ「ちやばかりて
いらアと競合てゐる内愚二郎手早く餅菓子を
一つ丸んで頬張るナ「こゝ〜改金だそ酒肴は
坐したそておア菓走りこく菓子の皆女も入仕へ内

MARUZEN IV

文法動詞

たのはナ「らくつたのはゲ「牧ある中の蒟餅たなな
ド「へン酒肴も保糧ちんの古い蒟餅だとひでなくこれは
一トツ摘まむナ「コレサ〜そこまそ坐したんだト「仕の
は愚二さんの喰つナ、カスラだナ「ソウ〜二人ふつあ
許まくいれてはとキヨロ〜菓子皿を祝め通し「オット
東のはこと有平糖すとあつ六ツ摘むゲ「そふ快
じとられちゃをゞ「月たた豆だナ「ナニ即た豆がある
巻かへこいつはこっちへきゝ日巻ト「二人を仕
外間のわり、たで菓子位で金米糖の角ぬ立つて

しちやがばかにじ〜

急?

前を承ける續き筆勢衰えず奇巧とふべ

牧童の句等々一段の妙あるべ

しさのいとすると云ふ「ソンナ甘い豆のそそくふあの
かこれも飛ぶ人子のき兎か」「兎の後ある蔵
中の月」「月の出の面の雁やチ」「雁なく名のしく
秋空々」「空の琴きく」「松風よチリ〳〵」「ある木蔭煎
餅」「木蔭まつもる霜柱々」「柱は二階の橋の下谷
岡埜の金鶯のあんの」「なあてへ」「東上うるせへのの
字をいくつふの」「の五つぶのふちのあせと大乱
痴愚の驚きの茶盆を跳ねとばして危須を引くを
うへすど持立た茶の猫危命の收倉へ流れ込む
ケ「アヽッッッヽヽとも乱逃く表裏の煙草盆を足へ

蹴飛ばす蹴るとまで三行前まけとぶとふ字まで重複すれば

引の中火入を蹴飛ばす「ソレ〳〵」蟲立が焚るハ
弓の茶でふつかけろコレサ悪三さん手傳ひね
へなダ「オレいたのしみの見物ぶと大ごつきの茶事
亭主あすいしくうけ来る「大分騒々しい事でも
生いまれダ」イエナニ先付るとて出ません悪
二印とをあへば
○水いらず仲間同志のくわしさはぎくいじさいざ
まて鎖められた魚
佐実燈ける三人各用を（這入まて道ヲ塩を流しや
て部屋へ戻れば晩餐の用意一方諸調ひ燭燭の男

作者所感

て酔見の目を覚ってきら〳〵煙き濃焼の烟の月
は白く周囲の畫の紅を眺む猫尾介みこ〳〵な
が〳〵「サア〳〵これ〳〵ぞこつおの世界じゃ」「さつきの
乱痴気騒ぐもんぞ外の世界ぞあるめへス」下女
「ちな〳〵お面白と猫尾介さんて」「へ、こ、これはぼ
が王夏木立スダ」「こちらでも死やす」下女「ハイと面白
をすることうかあ東京あのものらくチョイと坊ぬけし
た顔をなれど飲む印最早日を紛く衣襟を濃
ひあしそる身なるなってオホン〳〵とをんくもない
咳をしなが「チョイと姉さん地をのかすすて

画人の如し

下女の吻合妥

作者の得意

そつちニ人へ恩義を尽すとは チトちろ簡が
通ふかと存ず やすの木「オヤ〳〵佐伊で痛みへます
つい好く方は取かしくってろくるお頼もえ元
ますん位ふ生娘でしょいますが」「トハ チト受みく
きは詑宜かな者と杯をそて「ヲット〳〵有やしと
妙な身振をして酒を飲むダ「姉さんおめへさんは何
をうるおえ掛半しと恨しネ女「オヤ嫌いた恨で
ちを(まるの)ダ「ウしと小首をのこむ小膝をおお
ア、見た〳〵さつき隈場でおりるかったつけ
嗜「ハ、ヽヽヲホ、ヽヽ」下女はこれそしほ銚子を持つ下

へ行く。鈍「今の代物は中々御な柿だぜ」「成生金の小鳥屋や祇園がいなせる代物をしかもあり相棒ものうらが」「さこそめそる知れるい」「とうして」「何の用で又さうしたの」「何しろ堂するが」「生た祇へる事よ合点」「莫くするかしら化祇へ」「オキャアガレ」「乳一トツと杯を思二郎みさしだから」「何をうく酒は」

猪尾分更
ちず

成参の訳当意即妙なり

「勿論も常ス思二郎杯をとるなから」「そんもはるもお」「つ」「か減ッケ」「ヨーく、奇遇この中と鈍た郎はしきうも下卑話をきめて」「茶椀盛の蓋をとって又て」「やア〳〵不思儀くしく朝の切目が落とちんめて」

作者配意の句

MARUZEN IV

絶妙

上左工門、涙そしてみるは迎は何だ男の下六丁の奥か鯔細のき方色黒き方頬長き方唇から乳のスへ二の々て三寸許のきる瘡あり腦のつうひから背骨ゴて突瘡あ五右瘡は焼串の痕ならんの「ケ」「ユ、コレ鈍的捩弥の役人の書面をトやアしめし縁をも不工事は遅かつし」「煮魚は何ぶ魚ごつりや馬飼る鎌倉の名物だねとりひなから椀盛の蓋をとる」「サア〳〵大変な料理ぶぞ頑固合点の西洋料理のテエブルを向つなのを祇へ」「さつぱり喰ひがわうら祇へ」「エグ」「ナンダ〳〵悔りなるを手を左指

の料理屋の亭主が「水の敵をしらなけりゃ仲間の
言葉も肩身のせまへとなくれへな割烈魚の忠二
さんなや料理と名うつきや腹胴膳の煮汁で鯉
の生作りでも食ひ方と庭丁の扱ひ桜の赤水仕
へ事をけち程ほくもれへるぶ芋何でも持てさい
ド「へン言草の大いの場で言のねーのは天下の
掘ぶと梶をとして」「ソレこの桜の種ヨ」「ナスツポンの
丸焼ガくを突て歌中上林とふぶへで庭の方
を沈んでなれの母親を帽らめ」「相を詠めて居る
ハスと言はれて居ハ二郎こは〳〵なのから梶の下へ落

MARUZEN IV

をれて掻廻してゑもなの〳〵動く茶をも
ずれは「ウ〜ナルほどスツポンは執念の強へものだと
ほれ〳〵トン〳〵上の方から突つく方尾命傍が「ハ〜ミ
遣やれ乳りや桜の傍ばたい忠二郎も乳と
ぶつき「ハ〜ミ竜の画だハ〜ミ」ド「コイツハ大変だと
つ郎ゑとを駆きちら」「なる々輔のまはりて来る
鉢太郎を呼くも登まる傍を壁傍乳壁るも乳て
「ウ〜ミウ〜ミ、ア、ア、せつねへ何の原は後へのウ〜ミ
ア〜ミ苦しいゆけ舟エー」「コレサ〳〵こは海辺じゃ
ん祈へ大きな声で助け舟〳〵とどならふまん京

瓶向は巧者
亜三郎は巧なり

いくらか三姫槽で漕ぎそうな船の枕ていうアマア
静まるとならうまいドウ、ここの位な意ないかダ
きゃアダレオイ〜猫尾角的つき合の旅(男ダ女
達の苦んでいる傍でグビ〜やるとは情夜〜菓
子持宮して居るみ一すうてくごうしオット
よし〜と飯の菓子桃な何の水菓の様なものを
て来ル サア〜こ小を飲ム不弱痛と病気6全体ッ
グソリヤ有ってへと鈍な印を一に飲まるとド立
腹くせへデッ〜〜ペッ、こりゃたんどダ何
の菓子そも〜此菓は拙家一傍の如菓如珍散

と焼して盃洗の水一杯半入一杯2前ジ軍国の
刺身二片入、酔面の如菓でも生、

平田篤胤

○滑稽貝屋川叙

戯作者文人

道中の滑稽は一九翁の膝栗毛餘人の狂著をけ
ちらす志遊蕩の徒は塑丈子の八笑人但亦の
戯作をわるくもさふ本家一流名代の手柄誇ふ
人頭の掛金を外すアヽ知驚な作なるかな不佞
吉年の文月立戯仲間三人連文珠の短馬ない
馬知とも路銀百貫のつくるうくる笠一蓋矣面
き旅の江寫詣稚子間の白面が哥ふ鬼の眼ぬ
侯の雫を漂漂ぎ馬飼うつ鎌倉の星月犯ふ滑り
の底まつてえて一文の価打なき筆先ふ道中の

文の解化規必ずしも必要なるべし

良い後味のあれますか

模様をつき綴る見屏風と名けしは江の島土産と
ふ詩ニナアーニ面白き作なん手二子既る世る
をて滑稽の奥迄穿へ通る面白の世音み入る。

不倫のかきは唯美の底をうるて色を色をなつるいろ
はっ子の書ふれば お師匠様の二子み様蓋の
恋つくいみ字すすれと蟻の一念天まで届くけて
巧なることはもて又 富の山を築も筆の塚をつくるなる。ぐんぐて蟻
ふつかず者 客味ひぬ女 栗をみ駕してワキヨシ(と八天人を跳倒す
を らんことをを が 梅を絶て 弓神様 祈 まるん

如の対体意味
通ずれ唯みつい
ぶ「ニ」ニ四文字を
終みをつ九るの多
なり而して実松
は滑稽見廣れ
て唯ま一点の芝
居あるい仏るや
是れ評の正を得
ざる所多余は
私然多文学
為ける情おさら
る得ず嗚呼

評曰春の叙景
二木下闇の字
アタラズ
四句春を冠す

自為其の四字の詠を序していしたの四字を冠とす
いほをは花のうした闇 ○ちつけき蔭の為のはは
○なの葉もこまろなぐ ○志ばの実そる春風心
○耶のめ花のすぐうを女 ○しげくと鳴ける蟬の色
○はとふく私み家祈ぶ ○しも置くとみるまで
○いさ宵月は雲隠 ○志水戸の風は音寒し
○はを散果て一月夕夢 ○志ぶれるそまる楓葉の
○いろ色つらくふる雪の ○色ぬなが木々もも

思案外史が自為髙の歌閑を
美妙斎

評曰
四句冬を字す

ほなさくはるの朕をた　志ぢこ庵のあるじや

○蕎麦みちみて同じ心を　半可通人

春きらめれば　庵ゆせみ　嗤を乱す　志ぢこの海苔の

ぐなりく刻蕎麦み　葱の絲は紫色のとけし　夏

おとなのへば門涼み　天ぷらの落衣きつ　袖ふく風のひや

索麺み　焚ゆる蛟造の煙みうすき近きもの木の

げみ一壺の杜宇はめつらくしもたたうらう叩し

く目みもつ涙は山葵のきしるやちん　秋の岳やの

月見蕎麦み大盛　難の夜をふうて　牛むらる卿

くなる思の音のいと　初やのなるは手打ぶいあらしと

刻蕎麦の下ニ「の紅みノミ字ヲ脱ス

卿くなるのなるニ字刪るべし

思ふ冬は雪の降れば　柿み卿る夜寒な巨

燈へるとぢこめて　鶏南ちんの聚みは何

つきせぬ詠めある心　のみ小部とつへと節ふりのし

つけき父を忘らびて　思事外史こそび住古せし

庵をそこみ結びかへて見つきも夜し凡物の一構

はせを笑をばすしこる人が心意をとは五七くの

十月をの月みそ　しらくの枝の廣き底は何

而の音きくみちるめれ　不破の月偶らさるはいお

しく柱い麺棒のいの　つきて太のちんを杉菜の

初くとも長く刺らき　とちんとせん叶月の三なな

新奇絶妙の句

上曜はあ乗もあすの節はんこ夢こうひなどう
ましとて栗味和の隅なき文とちをつとへて生数
閑せんほどを祝の文すゐ）と綴りてよと注文のせは
しさるつゆ加減のすあをゆふ陽をく場橋
のはが疲れるるをすいしてこれはお訓之
とのつぎこみ侍りぬ

通算かけこ
と縁ことはを
塊れり半可通
子近来の傑作

十月第二日

故郷は芝住居は神の
山上京田力と自惚れつ
枕下有ればこれ

思第十史第十

MARUZEN IV

○七言絶、七言絶の下の句の末の字を韻す。

（は恒好乃士、わ仄盟い字ゆ。）

○失題

緑山治史

多恨多愁骨半銷。阿誰入梦度情宵。
断腸の金楊柳。間便春風妻柳腰。

紀州之

白露はもと（こ）をうちの花のおきて
くさのうとやちるしぼるらん

身は雲なるおもいでのいとあから
おひとりとなきくらもみつくり
蛙
蛍

あらしの雲なみくずかけわたる
あめ一ぱいのいのちもろもろ

ゆうすのちるをえて
初夏

なぞ
ゆくへ二ちむ物はみんどかえるつゆさ
は雨にゆくちるものてかみ

初夏
紅花
そびらるのの言問ひそもるさくひみて
さびかるものいすれぎりろう

寄れ雲
美めうな
なつ〳〵ひとへ人をあつへそ
うらなきれこなんそ

東海道　紀行

春の草

四季音あり

○寄肥溜　柿市蒂丸

肥溜のくさきはとなりのこゝろ

あかき溜をくむ人ぞあり

○寄屁　今

○あちこちの

二世曲亭

陽炎は伏しさゝらの踊かな

出る日をまちもちの夜の月

○弥二喜太月を見る画に

二人づれ夜半にうかれてのる船や

月見るあるで勝ちなる

○無題　秋乃有明

はるかぜが吹くぞちりぬる江の花

いろのさかりは雨の夜ゝ

難波　梅雨の残雨

美人画文

東海道 加賀

春の草

四季百題

○寄肥溜恋　　柿本蒲丸

肥溜のくさき中とは知らずして
しかさ思ひをとむ人ぞあさ

○寄尼恋　　今

ぬ人とするくさぐさを堀尼の
花地の股よりわれみるかな

○望の夜に

望のし水ぬ上とはこよひ酒をのむ
ひちやすの小る月を春に

陽炎に似しさらわ酒小てふわけを
出る月なもちきも七の夜の月

○弥二喜太月を見る画に

二人づれ夜中にうかれてのる船や
月をみるあで勝くりがる

○無題　　秋の有明

はるかぜか吹くぞちりぬる江の花
いろのさかりは雨ふる夜ぞうらら

難題梅雨の残雨　　美濃国

○さのみざれのふる雨にさくこうの花を
きえぬばりそる白雪ゴこそ

○夕暮の春の雨
旅美南史

そとかぶに山桂宇おとがれて夕かりかえ
りを行く乞山の夢ゆ逢ぬやらそへ。アレ逢
寺の庭のかね。おもひかますだゆるみかいち。
雨のしょが〜ふる夜やいつりいり
の夜ゆすれ
○金のゆゆいつるが野ゆるよ秋とゆる

片岡先人の余韻流を紙る似く風作者の心勇意見れず感

陳腐可厭

日にやみまきる
○折るかおれるか白の高雪ゆ冠るつ
ちゆ夜のゆ
きのゆこつちへ咲くは花と今ゆはちゆ
へ風ゆ
○勤とゆるをとゆ折るゆば
に苦かしら
○悪ゆみのあい心の歌ゆ
ゆってゆく
漢詩入

絶句を京都にて今更ら誠
別さ恨めしい
前後矛盾を辨じる既に楽しい
君の胸

唐詩五絶入
新の景凡も空ふく風で
鳴鞭の酒肆　後段相倡
百万一時尽　今情無尽
若い盛りの無分別

MARUZEN IV

祝切紙
ふれて
そめて

「つらゝ」とたるひ」との別　二世田宗

かりそめに晩の早ふたをせばるるの苔さなんあのれ十
六の頃ころほひの清雲村の柳の樵耕蛙船の名
そいてもきホのはすと絶しめる一場を揭げし
豈料らんや文中の「つら」とつたるひ」とを設まうて
紹る所の使いす徳 聊満 大人の駁されたるそし世俗
の此の二語をあやまるものかすなわち同氏が
云れしこの和歌も云へし且いまこのあれが説を
載するるん耻をいを俗故知水とな言も亦
はこ

徳川大人の辯駁書

異説（清貧考巻之五）第二十六百六十八号投書懐

ゆゑ掘ひらかしもきの木のはなしの文中に氷柱をつらと苔水はいかのそやいうくはすちちも氷まて古歌に

つらいなり汀をめぐる春風に池の心し解けやしめらん」古今集の氷なるとぬらす彼の軒端よ

に下り又枯る下るは垂氷（タルヒ）なり古歌に

岩ほくれるひの上の早蕨のもえ出る春風に解ぬる氷」古今

けに此言に薄雪ふれ雪て見しやまも仲哀紀

MARUZEN IV

臣が考に「田の名関のつらく解ぬ」とあり玉園山の峯を霞める」伊氏物語に「解なさい輕のたゆは解けなむ」なとはつらしの語ふくるらん」或は垂河百首に「楼の春うすゆるたゆひの春風に打そてなく鶯の声」とあて全く池塘のめき氷ふしのそつらく（連氷）といひ樓に垂る枝に下るそたゆひ（垂氷或は氷柱）とはこふ人けり一説なるたゆひは霜雪名なるとい（でい）すぐ下き記を得ぬ恐らくはこの氷解説なるん

有に除くるる引札の文章は三段に掲げて大
方の紙幅に備へるものもあれどもこれ程
短き方まで櫻木りちりばめる人なと
てわざく見るりこしもれば芸伎をこに出
す

扨下の文字も通人自筆なれ八
きたるもの妙しき処に伊とる風詩の人力
るもことにもりちうとはちと午前は堂
から三寸きのあるべや

MARUZEN IV

孔雀 傳説の話所は京而へ

摂津みち

酒井弥

緑芽吹く

すその永

美濃吟山陰

（京の帰り）

熊美師史（熊谷）

K. Kudo with a grateful

河部老親

彩雲燃枝女

Kobelda.

金俗利地方

大沢清子

MARUZEN IV